

持ちが結果として表れたと捉えられよう。

【結 論】アンケート調査を基に、以下の2点について提言を行った。①(医療現場の課題)方言を話すことが出来なくても、地域の方言を理解することは重要である。少なくとも、歯科の分野で使われそうな方言の把握が必要であり、方言ガイドラインなどの作成が求められる。②(歯学生教育)方言にはメリット・デメリットが存在することを教育する。

## 20) スキルス・ラボを活用した研修歯科医および医員の5年間の実績

○清野 晃孝<sup>1</sup>, 釜田 朗<sup>1</sup>, 長崎 慶太<sup>1</sup>  
中條 雅人<sup>1</sup>, 小磯 和夫<sup>2</sup>, 齋藤 高弘<sup>1</sup>  
(奥羽大・歯・診療科学<sup>1</sup>  
奥羽大・大学院・高齢者・有病者歯科)

【目 的】本学中央棟4階にあるスキルス・ラボは、第4学年の模型実習および臨床実習のシミュレーション実習で活用されているが、さらに臨床研修歯科医あるいは若手医員の臨床能力のスキルアップのために個人の自由な時間帯に特に規制することなく、自発的活用を2006年度から開始している。今回、2006年度から2010年度までの5年間分のスキルス・ラボ使用チェックリストを資料として、その実績から若干の知見を得たので報告した。

【方 法】調査資料は、中央棟4階指導員室に常備してあるスキルス・ラボ使用チェックリストであり、5年間で2102枚になり、保存されていた。統計解析として、各年度間の使用総時間数の総当たり比較をMann-Whitney U-testを行った。分散の比較としてF-testも実施した。また臨床研修医1人あたりの使用総回数を調査し、さらに各年度において本院の臨床研修プログラム間の使用総時間数をKruskal wallis H-testを用いて比較した。

【結 果】2006年度から2010年度までのスキルスラボ使用者数として研修医は毎年ほぼ90%以上の使用率で、医員は毎年1桁の使用者がいた。臨床研修医1人あたりの使用総時間数は平均値で、2006年度が11.62時間で最小であり、2010年度の22.14時間が最大であった。また、解析の結果、

全ての年度間の組み合わせにおいて有意差を認めた。しかしF-testの結果、06と07、06と08、06と1007と08、07と10、09と10の6通りの組み合わせには有意差を認めなかった。研修医は年間5から7回程度スキスラボを使用していた。H-testでは有意差は認められなかった。

【結 論】1. 毎年、90%以上の臨床研修医は、自発的にスキルス・ラボを使用しており、また、年間1桁の医員が自発的にスキルス・ラボを使用し、研鑽していたことが分かった。

2. 臨床研修医のスキルス・ラボを使用時間は年間14~22時間で、年度毎に、差があった。なお使用回数は年間5~7回程度であった。

3. 各年度において臨床研修プログラムの相違では、スキルス・ラボを使用総時間数に有意差は認められなかったが、Bプログラム前半派遣組が多い傾向が伺えた。

## 症例展示

### 1) 矯正歯科研修カリキュラムの修了認定症例 マルチブラケット装置で治療した1症例

○今田 玲美, 福井 和徳  
(奥羽大・歯・成長発育歯)

【症 例】Angle I級叢生

【初診時年齢, 性別】16歳2か月, 女性

【主 訴】前歯の叢生

【診断名】叢生

【所 見】顔貌所見より顔面非対称は認められない。プロファイルはストレートタイプで下顔面高が大きい。模型分析より上顎中切歯以外は標準より大きい歯冠幅径を示していた。上顎に-4mm, 下顎に-6mmのディスクレパンシーが認められた。骨格系では、上下顎の相対的な前後的位置に問題はなく、上顎中切歯の歯軸傾斜は標準範囲内、下顎中切歯歯軸は舌側傾斜が認められた。大白歯関係は左右側ともAngle Class Iであった。下顎正中線は顔貌正中に対し右側へ1mm偏位していた。口腔周囲筋の緊張を認めた。

【治療方針】

1. 上下顎左右側第一小臼歯抜去によるマルチブラケット法を適用することとした。
2. 保定 上顎はBegg type retainer, 下顎は